



はじめに

このシリーズでは、私が相棒辻氏と共に、「完本」～「フィールド版」、そして新刊本に至る調査行の中で、蝶屋の中でも普段あまり話題にならない、ジャノメチョウ亜科やセセリチョウ科のチョウ、茶色っぽくて地味な蝶たちに焦点を当てて紹介したいと思いました。地味な蝶だけに幼虫たちも、巢に隠れたり夜にのそのそ活動したり、何となく控えめに生活しています。そんな愛すべき地味チョウたちについて、思い出話も加えながら語っていきたいと思います。



1. ウラジャノメ

地味チョウシリーズの1番バターはウラジャノメ。初夏の雑木林、林道を歩いていると木々の合間から、目の前にス〜っと飛んできて、そのまま向こうの木立の中に消えていく。何を考えているのか、つかみどころがない地味なチョウなのですが、これがなかなか愛すべきチョウなのです。

世界的にはヨーロッパからアジア極東まで結構広く分布しているようだが、日本では北海道と本州のみ。道内でも、どこにでもいるチョウではないので、蝶屋にとっても見落とされるチョウかもしれません。

ただ、裏面の眼常紋の異常タイプのメナシ型は人気があるようで、旭川近郊の低山に網をふるうマニアが集まってきます。

また、北海道のウラジャは裏面の白帯が幅広く、亜種 *jezoensis* Matsumura とされています。



Part 1

大学(虫研)～道新本時代 《1972～1986年》

小学生のころから蝶を追いかけるはじめ、長い時間が過ぎ去っていた。札幌～紋別～下関～米子時代、ウラジャノメとは、ついぞお目にかかっていなかったように思う。ウラジャとの初対面はいつだったのだろうか、はっきり思い出されないのだが、大学2年のころ空沼岳で撮影した記憶はあります。虫研時代、ウラジャと言えば故竹内君でした。彼は農学部林学科に学部移行した後、北大苫小牧演習林での実習の傍らの蝶探しの報文を虫研の会誌「蝦夷白蝶」に書き留めています。それを読みながら、そうか支笏湖の周囲の林にはたくさんいるのだなあ、と思った次第。それを実感したのが千歳の美々というポイント。ここは今は絶滅してしまったアサマシジミのパラダイスでずいぶん通ったものです。大学卒業後、兄拓行と相棒の辻規男氏と坪内純氏と「道新本：北海道の蝶」をつくることになるのですが。ウラジャは自分の得意分野ではなく、「道新本」ではもっぱら兄の観察記録で紙面は埋められています。「道新本」は幼生期も含めた生態写真が売りでしたが、ウラジャの幼生期は、兄の書いた本文を下に紹介しますが、なかなかハードルが高いものがあります。それでも兄は美々のフィールドで野外幼虫を発見しています。それを飼育した蛹も頁を埋めることができました。当時から兄の観察眼は私と相棒の域をはるかに上まっていました。兄は「完本」を完成後2018年に急逝しますが、我々は兄の足跡に学ぶことばかりです。私的な話になりましたが、ウラジャは兄の愛する地味チョウでもあったのです。

写真・図は「道新本」から
(成虫は私、幼生期は兄の
写真)



*竹内氏はウラジャ・ベニヒなどの地味チョウマニアだった気がします。故郷の浜松ではウラナミジャノメも累代飼育していたなあ…



▲葉上の♀ (1976. 7. 18 千歳市美々)



▲4齢幼虫 (1985. 5. 26 千歳市美々) ▲食草の茎に下がる前蛹 (同左座) ▲食草の茎に下がる蛹 (同左)

幼虫は越冬前は見つけづらく観察例はほとんどない。翌春やや遅くなって、食草の葉が伸び始めると斜めに切りとったような食痕を残して葉を食う。幼虫はその食痕のある株の根元付近の緑の茎に止まっていることが多く見つけづらい。昼間でも葉を食うようである。

Part 2

標茶時代 《2007～2009年》

ウラジャノメとの出会いは、「道新本」出版以降、空白の21年を過ぎた標茶高校勤務時に訪れました。標茶高校は道東の農業高校から進化した総合学科の高校。東京ドーム55個分の255haという、テレビの「なにこれ珍百景」にも紹介された広大な敷地に、ロボット搾乳の最先端の牛舎がある、実に北海道らしい高校です。普通科もありますが、生徒たちは農や食品製造の学習を進めているのが特色の高校です。もう一つの特色が環境教育で、「湿原の科学」など環境系のオリジナル教科がたくさん設定されています。環境保全を目指したクラブ活動に「湿原再生プロジェクト」というのがあり、学校の敷地にある軍馬山に流れる川を使い、牛の糞尿をカサスゲ群落で分解させようなどという研究が官民の協力を得ながら進められていました。

私はそのプロジェクトに付き合いながら、時々生徒たちと虫採りをしながら、素晴らしい広葉樹林が広がる軍馬山のチョウたちをじっくり観察することができました。

前置きが長くなりましたが、この軍馬山でウラジャの幼生期を越冬前もふくめ観察することができました。食草も同定できウラジャの生活史の一端を「完本」に紹介することができました。では、その詳細は次頁で。



標茶高校校舎。まるで大学のよう



高校の敷地内にある軍馬山の春



環境学習で昆虫採集



カサスゲの繁茂する池を造成



コーンの刈り取り跡にタンチョウが飛来

軍馬山のウラジャノメ

軍馬山にはミズナラ主体の明るい広葉樹林が広がっています。ゼフィルス、他、カラタカ、ゴマシ、ヒメウスバとウスバ、ナミヒとコヒの混棲などなど蝶屋にとってはこの上ない環境でした。ウラジャは林内のあちこちで見られます。よーし、幼虫を見つけるぞと夏の終わりにスゲ類の葉を見ていくと、あっけなく1齢幼虫が見つかりました。カサスゲの葉に台形型に食痕を残しています。それでは越冬後も終齢まで見つかるかなと翌年に探し回りますが、夏にいたカサスゲではみつかりません。その年はNullでその次の年の春。人工池の近くの斜面のスゲに食痕を見つけゲット。食草を専門家に依頼するとヒエスゲという植物でした。下の写真の雰囲気はウラジャの環境なのでした。



カサスゲを食う1齢幼虫
(2007・8・14)



軍馬山の入り口。明るい雑木林に遊歩道が整備されている。



湧水を溜めた人工池もある。



ウラジャの発生する斜面と食草



ヒエスゲを食う3齢
(2008・5・24)



ヒエスゲを食う4齢
(同左)



人工池周辺を飛ぶウラジャ (メス)

Part 3

旭川時代 《2010～11年》

標茶の次の勤務地は旭川。旭川のウラジャと言えメナシ型。私は見たこともなく特に興味はありませんでした。フィールドを旭山～突哨山～嵐山、大学時代に虫研仲間とよく行った神居古潭などで観察撮影を続けていきました。そんな中、ヒメギフの飛ぶ旭山公園を歩いていた時、ふと林床を見ると標茶で見たようなスゲの群落がボソッ、ボソッと生えています。これは幼虫が見つかるかもと直感しました。7月に入りヒメギフの幼虫も見られなくなった頃、予想的中、ウラジャが飛び出しました。そういえばメナシは？とネットをふるうと、4頭目がメナシでした。初対面です。さて幼虫探しの方は難航しましたが、旭山の遊歩道で何とか1齢を発見。その後キトウシ山でもメナシを含め結構親しむことができました。飼育にも挑戦し、何とか冬越しに成功、蛹まで撮影に成功しました。



メナシ型



旭山で発見した1齢幼虫



ヒメギフが飛ぶ林床にスゲが顔を出している。（旭山）

旭川での食
草：ショウ
ジョウスゲ



終齢～羽化飼育シリーズ（2010年～2011年）

Part 4

退職後～現在 《2015～2025年》

退職後、富良野でしばらくのんびりしていたのですが図鑑作りの話がひょんなきっかけから湧いて出て、兄と相談しながら「完本」作りが始まりました。ウラジャの担当は私が引き受けることとなり、旭川の産地での取材が始まりました。成虫はともかく幼生期の写真が今一つで、特に終齢の野外写真がありません。もういちど旭山に通うことになりましたが、結局「完本」には間に合わず、標茶～旭川で撮りためた写真を使いました。前に示した「道新本」の写真はさすがに使いませんでした。(下の写真)しかし貴重な写真です。5月26日撮影とあります。スゲの根元に隠れているのだろうなあ、この雰囲気イメージしながら探索は続けていました。旭山のとっぺんにはテレビの電波塔が林立しています。その脇から入る遊歩道周辺が観察しやすいポイントです。「完本」発行後も毎年のように雪解けを待って林床のスゲ類の食痕を丹念に探しました。

そして探し始めて4年目の2018年5月14日、やっと終齢を発見しました。食痕のあるスゲの株の上を移動している幼虫でした。「やったー！」と誰もいない林の中で叫んでしまいました。この写真は、2020年発行のフィールド図鑑で紹介することができました。やれやれ。



兄の写真(1985・5・26千歳)



旭山でついに発見した終齢幼虫(旭山 2018・5・14)



見つけやすいポーズでした。



持ち帰って撮影。

その後も旭山～倉沼、キウシ森林公園で観察を続けています。とくに旭川に勤めていたころよく通っていた倉沼の遊歩道はウラジャが多い所です。メナシも出るので、シーズンにはネットを振っている見知らぬ採集者に必ずと言っていいほど出会います。私もメナシ型・ノーマル型から採卵してみました。採卵は簡単でポロポロと三角紙の中でも産んでしまうぐらいで、何十匹と飼育する羽目になりました。越冬は結構難しいのですが、越冬野菜のように畑に植木鉢を埋め込んで冬越しさせると大丈夫です。メナシ型の出現を期待したのですが、メナシ雌からもノーマル雌からも変わらず出現率は40分の1くらいでした。

越冬明けの野外幼虫はあれだけ苦労したのに、勘をつかむと結構簡単に見つかりました。スゲの葉の色とそっくりの体色に白い微毛が覆っていて美しくかわいい幼虫です。



メナシウラジャが飛ぶ遊歩道



茎を登る終齢(旭山 2024・5・15)



シヨウジョウスゲを食べている終齢(2024・5・22)



葉を斜め食いしている。(同左)

Last part 産卵

最後に心ふるえた話です。すでに観察日誌でも紹介しましたが、ウラジャの産卵を見てしまった話です。2024年7月10日、A先生いつもの倉沼の遊歩道をカメラ片手に歩きました。明るい落葉樹林が覆う低山ですが、ベルト状に草が刈られていて、そこにヒヨウモン類が大発生しています。ウラジャはもうシーズンオフのようで採集人の姿はありません。

陽射しが高くなり、水分補給で水筒を出していると目の前に少し離れた♀がやって来ました。(写真A)一応カメラを向けて、水を一口飲んでいると、ヒラヒラと草むらに降りて行き、翅を開いてこちら向きに止まりました。むむ、カメラを向けピントを合わせるとなんと腹の先っぽから卵が出てきました。(写真B)そしてポロツト産み落としました。(写真C) いやあ～こんな場面に出会えるなんて。久しぶりに心臓が高鳴りました。12時54分の出来事。

ウラジャの産卵で今回は終わりにしますが、シリーズは続きます。

では。



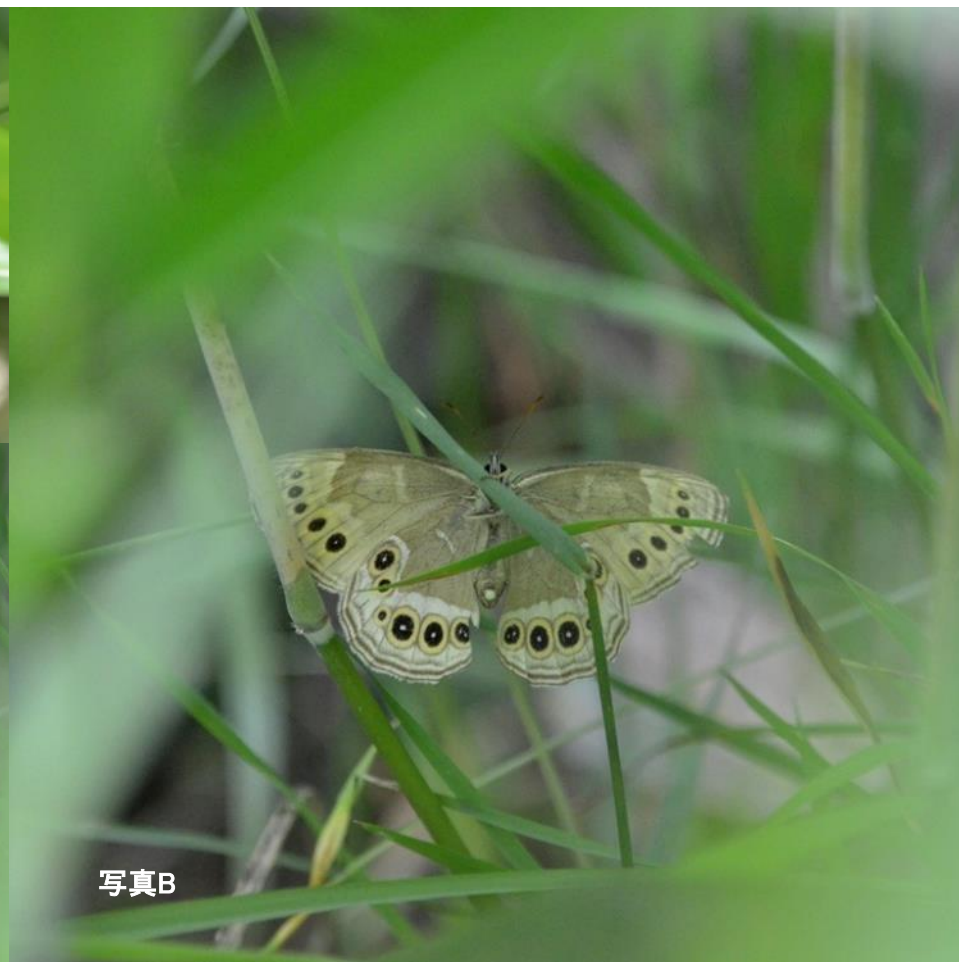
A先生と撮影会



写真A



写真C



写真B



The end